

小学校社会科の授業のユニバーサルデザイン

第3回 「社会科授業での視覚化」

◆何のための「視覚化」なのか

社会科授業は資料の扱いが多い。したがって社会科授業において「視覚化」は当たり前なのではないかと思われる。しかし、ただ資料を見せればよいということではない。

前回（第2回）で村田氏は、

社会科では、「社会的見方・考え方」を獲得させることをめざす。一人残らず「すべての子ども」が獲得することをめざす。

と述べている。

社会科授業において「視覚化」する意味は、「社会的見方・考え方」を子どもたちに獲得させるためである。つまり、社会科授業の本質につながらなければいけないということである。効果的に視覚情報を使い、子どもたちの興味・関心を引き出し、理解を促すために、「見せ方」を工夫しなければいけない。つまり、「見る」だけではだめで、「見て考える」ようにさせなくてはならない。

◆「視覚化」する意味

- ①「問い」をもたせること
- ②「思考」させること
- ③「対話」させること

資料の見せ方を工夫することで、子どもたちは興味をもち、問いをもち、考え、対話しはじめる。

「え、おかしいよ！」

「何か変だ」

「もっと見せてほしい！」

子どもたちの意識が集中し、自然と子どもたちの声が聞こえてくる。

「視覚化」は、学習内容とセットで考えなければならない。教科の本質（「社会的見方・考え方」を獲得する）へとつながることが必須である。何も考えずに資料を加工したり、ただ資料を見せたりすることは、「視覚化」とは言えない。

◆「視覚化」の手法

視覚化でよく使用する手法として、

- ①かくす
- ②ダウトをつくる
- ③並べる・比べる
- ④アップにする・ルーズにする
- ⑤フラッシュにする
- ⑥一部を見せる
- ⑦順に提示する

などが考えられる。

以下、具体的に事例をあげて簡単に説明していく。

〈①かくす〉

5年生「寒い地域の暮らし」の学習である。



下の部分を隠した資料を提示し、子どもたちに問いかける。

『何をしていると思いますか?』

子どもたちは前時で「克雪」について学んでいるので、「雪かきをしている」と口々に答える。しかし実際には、ただの雪かきではない。

「え、だったら何をしているの?」と子どもたちは疑問に思う。

それぞれ予想をさせたあと、隠している部分を見せ、キャベツを掘り出していたことを理解させる。



(c)NIIGATA PHOTO LIBRARY/SEBUN PHOTO/amanaimages

このように資料の見せ方を工夫することで、子どもたちに「なぜ雪の下にキャベツを置いているのか」という「問い」をもたせ、その後、様々な「利雪」について考える授業展開としていく。

〈②ダウトをつくる〉

4年生「事故・事件のないまちを目ざして」の学習である。



子どもたちに資料をじっくりと読み取らせる。
 何の変哲もなさそうな写真であるが、
 「あれ、何かおかしい」と、つぶやきはじめる。
 「青信号の位置がおかしい？」
 と、気づく子どもが出てくる。
 本当にそうなのか、他の信号を調べてみる。すると、日本の信号は、どの信号も右側が赤になっている（上の写真は、こちらで画像を加工したものである）。子どもたちは「なぜ、信号の赤色はすべて右側にあるのだろうか？」という「問い」をもち、考えはじめる。
 資料の中にダウトをつくり、信号機の色に焦点を当てることで、「人々の安全を守るために信号機は工夫されている（赤色を道路の中央寄りに置き、運転手に見えやすくする）」ということ子どもたちは理解する。そこから、『みんなの安全を守る工夫をしているのは信号機だけですよ』と問えば、「いや、そんなことはない。他にもあるよ」と、追究活動が始まる。その結果、「人々の安全を守るために様々な工夫がある」という概念（社会的見方）を得ることができるのである。

〈③ 並べる・比べる〉

5年生「低地のくらし」の学習である。



(c) 共同通信社/アマナイメージズ



海津市商工観光課『海津市観光ガイドブック』より

授業の導入で、まず左側の写真だけ見せる。木曾三川に挟まれた地域には、川の水面より低い土地が広がり、過去にたびたび洪水が起こるなど、水害の心配が絶えなかったことを捉える。

その後、『さて、今はどうなっているのだろうか』などと問い、子どもたちに予想をさせたあと、右側の資料（実物のパンフレット）を並べて見せる。

きっとまだ洪水に悩まされているだろうと考えていた子どもたちは、その変化の大きさに驚く。「ええ!？」や「おお!」という声が聞こえてくる。なぜそのように驚いたのかを問うことで、「この間に何があったのだろうか?」「なぜこんなに大きく変化したのだろうか?」といった問いを引き出すことができる。そして、それらの「問い」を価値づけ、「小単元を貫く学習問題」につなげることができる。

〈④アップにする・ルーズにする〉

6年生「大昔の暮らし」の学習である。

どの教科書にも、縄文人の生活の様子を描いた絵図が掲載されている。その絵図の全体をはじめに見せるのではなく、ある一部をアップにして見せる。

『何をしている縄文人でしょう?』と問い、次の1点を見せる。



「鹿をつかまえている」「弓をもっているな」「狩りで獲物をつかまえたのかな?」

『そうですね。では、これは…』というように、数点見せていく。

『では、この他にどんなことをしている人がいると思いますか?』と問い、子どもたちに自由に予想をさせる。

その後、『では、この資料の中から、予想と同じようなことをしている人がいるか、探してみよう』と言い、全体図を見せる。様々な活動をしている縄文人を探すことで、縄文時代の生活の全体像が浮かび上がってくる。

最初から全体図を見せると、子どもたちはどこを見たらいいのか分からない。特に視点を絞ることが苦手な子にとっては苦痛である。まずは視点を絞って全員で考え理解することからはじめ、そこから視点を広げさせるようにするのである。

〈⑤フラッシュにする〉

5年生「わたしたちの暮らしと国土」の学習である。

『日本』はどこからどこまでなのだろうか』と考えたあと、日本の端の島を紹介してい

く。東西南北それぞれの端の島の資料を提示し，説明していく。

『では最後に，沖ノ鳥島…』



AP/アフロ

一瞬だけ見せてすぐに隠す。

「え，今の何？」「先生，もう一度見せて！」と子どもたちの見たい気持ちが増す。

『では，何秒？』

「3秒！」「5秒！」

『じゃあ1秒だけ』

などとかけ合いながら，再度見せる。

「え，岩？」

「鉄のような格子があったよ」

などと子どもたちはつぶやく。想定していた「島」の様子とは違い，子どもたちは驚きを隠せない。

そして，沖ノ鳥島がどのような島なのかを調べる。「なぜここまでして沖ノ鳥島を守っているのだろうか？」という「問い」を引き出し，追究させていくのである。

資料を一瞬だけ見せることによって，子どもたちは集中度を一気に増し，資料の世界に引き込まれていくのである。

〈⑥一部を見せる〉

3年生「昔の道具とくらし」の学習である。

洗濯板の実物を袋に隠して用意する。



『さて，何だと思いませんか？』持ち手の一部だけを見せて問う。

「洗濯板？」知っている子は答えるであろう。

『その通り、これは洗濯板なのですが、実は洗濯板には溝が彫られています。どんな模様の溝が彫られていると思うか、ノートに描いてみましょう』

子どもたちは自由に描く。そして、自分が描いたら、他の子がどんなものを描いているのか気になるものである。話し合いたい気持ちが高まる。それぞれ見せ合いながら、なぜそのような溝の形にしたのかを話し合わせる。それぞれの考えの解釈をさせる。

十分話し合わせたあと、『じつは、このような溝の形になっています』と言い、洗濯板の全体を見せる。子どもたちは「なぜそのような溝の形になっているのだろう？」とさらに「問い」をもち、考えはじめる。

実際の答え（溝の形の意味）が分かると、子どもたちは「本当なのか？」と確かめたがる。そのタイミングで、実際に洗濯板を使ってみるのである。

ただ『今日は洗濯板を使ってみます』と言って洗濯板を子どもたちに使わせるのと、上のようにして子どもたちが「使いたい！」「使って確かめたい！」という気持ちにさせてから使わせるのとでは、全く違う。

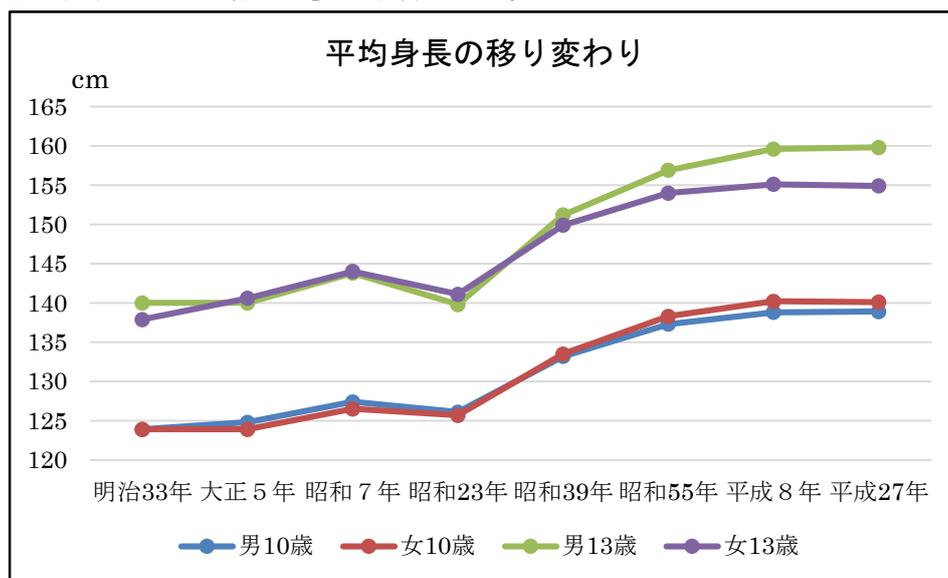
子どもたちは実際に使用することで、洗濯板に秘められた昔の人々の知恵を感じ取ることができる。「他にも昔の道具を知りたい」「使ってみたい」という主体的な態度が見られることも期待できる。

最後には、「昔の人々が使っていた道具には、たくさんの知恵が詰まっている」という概念（社会的見方）を獲得することになるであろう。

また、実物を用意するということも、立派な「視覚化」であると考えられる。その実物の提示の仕方も、様々に工夫したいものである。

〈⑦順に提示する〉

6年生「戦争と人々の暮らし」の学習である。



(文部科学省『学校保健統計調査』より)

明治33年から順に、平均身長の推移を見せていく。明治→大正→昭和と、平均身長は上がってきている。しかし、昭和7年から昭和23年にかけて、平均身長が下がる。

順に提示することによって、変化があるときの驚きが増す。

「え、どうして上がっていたのに、また下がってしまったのだろうか？」

「戦争があったから、食べ物がなくなってしまったのかな？」

「平均身長が下がってしまうほど、食べ物がなかったのかな？」

などと予想する。

このような資料の提示が、「戦争中の国民は、どのような生活をしていただろうか」ということに興味をもち、調べていこうとするきっかけとなる。様々な事例を調べていくことで、「戦争が国民生活にも大きく影響を及ぼした」という事実について理解することができる。

また、昭和23年から昭和39年の変化を見せることで、「戦後の日本にどんなことがあったのだろうか？」と興味を示し、調べたい気持ちを引き出すことができる。

以上、「視覚化」についての7つの手法を示したが、大切なことは、目の前の子どもに合うように資料を加工し、工夫して提示することで、子どもたちの声をたくさん引き出していくことである。

次回は「社会科授業での共有化」について論じていく。

【参考文献】

桂聖『国語授業のユニバーサルデザイン』東洋館出版社 2011年

村田辰明『社会科授業のユニバーサルデザイン』東洋館出版社 2013年

宗實直樹（むねざね・なおき）

関西学院初等部教諭。日本授業UD学会関西支部会員。
子どもたちが主体的に考え、「つながり」を深められる授業をめざして、日々の実践に取り組んでいる。

（2016年7月執筆）